

策定年月	令和5年2月
見直し年月	令和〇年〇月

# 麦・大豆国産化プラン

産地名：蘭越町

(作成主体：蘭越町農業再生協議会)

# 1. 麦・大豆生産の現状と課題及び課題解決に向けた取組方針

## 《生産における現状と課題》

- ・近年、作付面積は小麦、大豆についてはここ数年は横ばいとなっている。一方、生産量については、小麦・大豆とも天候の影響を受け変動が大きい。
- ・そのため、排水対策や適正輪作など基本技術の徹底を図るとともに、ほ場の排水や水稲との作業競合を回避する新技術を積極的に導入するなどして、安定生産と品質の確保をすることが課題となっている。
- ・また、高齢化や担い手不足などにより農家戸数が減少し、担い手へ農地の集積が図られ経営規模の拡大が進んでいることから、スマート農業技術や作付けの団地化などを推進するなどして、低コストで省力的な農作業体系を確立していくことが課題となっている。

## 《課題解決に向けた取組方針・計画》

### ①需要に応じた生産と販売の実現

実需者ニーズが生産者の営農計画に着実に反映されていくよう、生産者団体と一体となって、技術講習会などを通じた、品種別・用途別の需給動向の情報提供に取り組んでいく。また、民間流通地方連絡協議会において、需給のミスマッチが生じている品種（きたほなみ、春よ恋）について、需要に見合った作付けの徹底に向けた生産者への注意喚起を行う。また、実需への安定した供給が図られるよう、基本技術の徹底や新技術の導入、病害虫への抵抗性や加工適正が優れた品種への転換など、安定生産と品質の確保に取り組んでいく。

### ②団地化の推進

人・農地プランの取組と連携しながら、地域ごとの麦・大豆の団地化に向けた話し合いを推進する。土壌・排水条件・作業の効率化等に配慮した麦・大豆の団地化に向けた計画を各地域が作成できる環境を整備する。

### ③排水改良・土づくり

ほ場の排水の改善に向けては基本技術の徹底のほか、簡易明渠の設置やサブソイラーによる心土破碎、深耕により作土層を深くし収量確保に取り組んでいく。

また、国営事業や道営事業、団体営事業の農地整備事業等を活用して、計画的な暗渠排水の設置・更新を進める。

土壌診断を行い圃場条件に応じた資材を施用するなど、土づくり対策を進める。

### ④適期作業

麦や大豆の適正な輪作による安定生産と品質の確保に向けて、輪作を構成する作物や水稲の適期作業を図るため、スマート農業技術を活用した高性能機械による省力化のほか、早晚性を考慮した品種の選択、大豆間作小麦栽培などの技術の活用を進める。

また、生育状況を確認し、麦種に応じた施肥の適期実施により収量確保・品質向上に取り組んでいく。

### ⑤生産性向上の推進

実需者ニーズに合った高品質麦大豆の生産が求められている中で、近年の異常気象により天候不順の年が続いており、高品質安定生産が困難な状況にあるため、基本技術の励行や適期管理について講習会を開催し生産性の向上を進める。

※ 麦・大豆生産における課題(湿害対策、適期播種、土づくり、連作障害対策等の必要性等)を具体的に記載すること。

※ 課題解決に向けて取り組む内容及び今後の生産拡大に向けた方針を具体的に記載すること。

## 2. 産地と実需者との連携方針

### 小麦取扱量の現状および目標値

・出荷先別出荷数量  
(JAようてい取扱)

出荷先 名称	数量(t) ※R3年産	数量(t) ※R8年産
非公表	2,740.0	2,800.0
	1,028.9	1,050.0
	899.0	930.0
	661.1	680.0
	605.8	620.0
	529.9	540.0
	17.0	20.0

・目標値

R 4 (現状)  
面積 108.0ha  
数量 339t  
単収 313kg/10a

R 8 (目標)  
面積 82.7ha  
数量 283t  
単収 342kg/10a

### 大豆取扱量の現状および目標値

・取引先別契約数量  
(JAようてい取扱)

出荷先 名称	数量(t) ※R4年産	数量(t) ※R7年産
非公表	7,300	7,600
	5,000	5,200
	5,270	5,480
	2,000	2,080
	1,650	1,720
	1,320	1,370
	6,265	6,510

・目標値

R 4 (現状)  
面積 195.5ha  
数量 371t  
単収 189kg/10a

R 7 (目標)  
面積 147.8ha  
数量 302t  
単収 204kg/10a

### 《需要に応じた生産の現状と課題》

- ・蘭越町の小麦は、日本めん用（きたほなみ）及びパン中華めん用（春よ恋）、それぞれで加工適性の優れた品種の開発が進むとともに、地産地消の取組の広がりなどから需要が拡大したが、輪作体系や共同乾燥施設の処理能力の関係から需要に応じた作付面積の維持・拡大は難しく、特に、春まき小麦は生産が不安定でもあるなど、需給のミスマッチが続いている。
- ・「秋小麦：きたほなみ」は販売予定数量が購入希望数量を下回っている一方、「春小麦：春よ恋」は販売予定数量が購入希望数量を上回っている。主な実需者は、国内の製粉会社などとなっている。
- ・そのため、実需者ニーズに即した品種の選定やこれらの収量性と品質の向上を図り、需要に応じた高品質な小麦の安定生産を進めていく必要がある。
- ・また、需給のミスマッチを解消するため、実需者の販売計画に応じた生産体制の構築等、実需者との意見交換等を活用したなかで理解増進を図り、需要喚起につながる取組を進めていく必要がある。
- ・蘭越町の大豆は、中長期的に需要が増大している中、省力的な作物でもあるが、輪作体系や共同乾燥施設の処理能力の関係から近年、作付面積が横ばい傾向にある。
- ・また、栽培されている品種については、煮豆用に利用される「とよまさり銘柄」や「ツルムスメ」、納豆用の「ユキシズカ」等が導入されているが、用途別のニーズに応じた品種の選定やこれらの収量性と品質の向上を図り、需要に応じた高品質な大豆の安定生産を進めていく必要がある。

※ 産地と実需者については具体的な名称を記載すること。

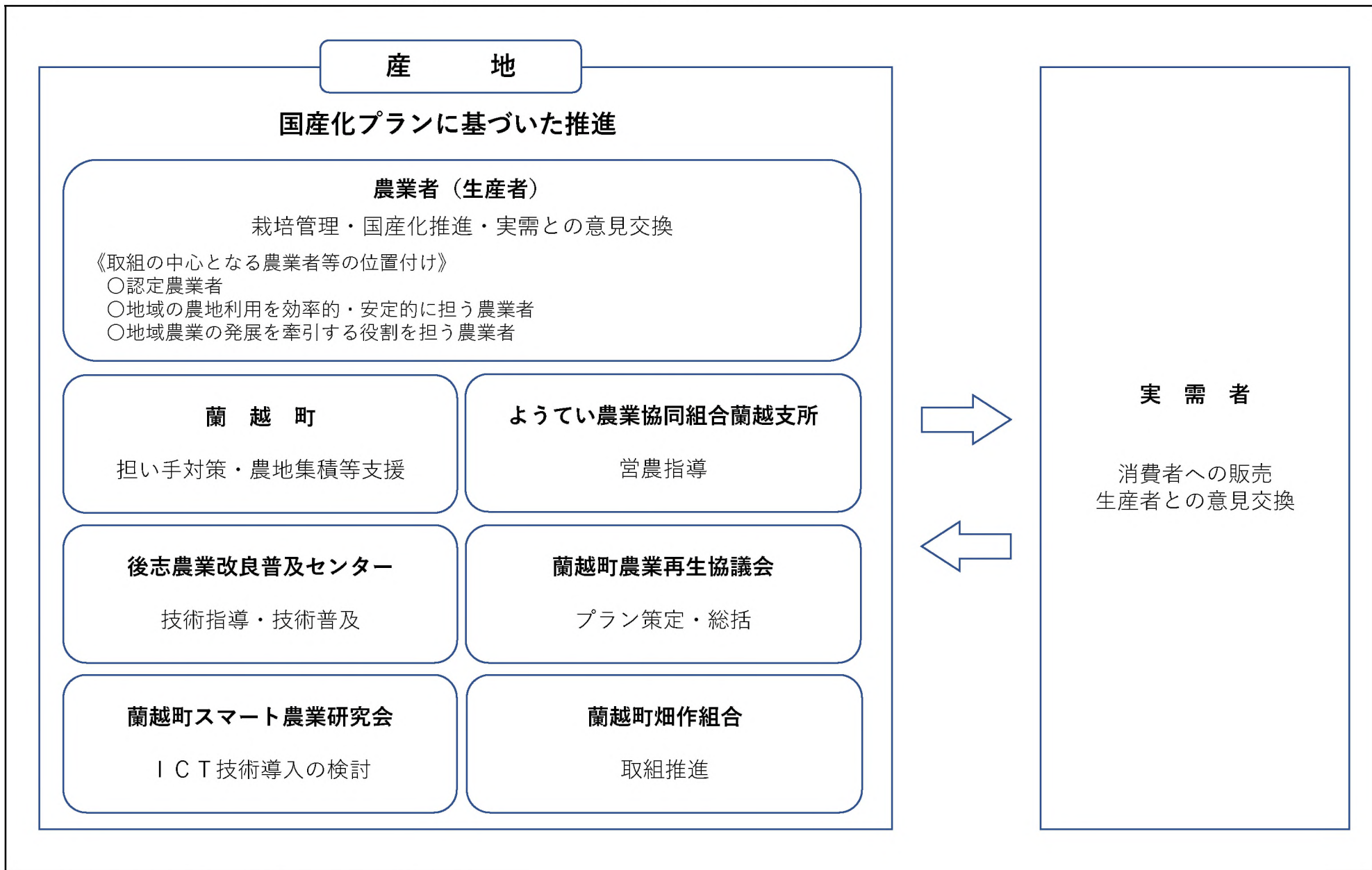
※ 麦の実需者は、麦を原料とした加工品等の製造を業とする者（製粉会社、製パン会社、製麺会社等）とする。

※ 大豆の実需者は、大豆を原料とした加工品等の製造を業とする者、大豆の販売を業とする者及びこれらの者が組織する法人その他の団体とする。

なお、販売を業とする者を実需者とする場合は、その者が販売する先（最終実需者）について、代表的な者の名称を記載すること。

※ 産地と実需者それぞれの国産麦・大豆取扱量の現状とおおむねの目標値を記載すること。

### 3. 麦・大豆の国産化に向けた推進体制及び各関係者の役割



※ 産地と実需者との連携について、図等を用いて明示すること。

※ 取組の中心となる農業者等を必ず位置付けること。